最後の献血

札幌市医師会
勤医協札幌西区病院
塩川（しおかわ）　哲男（てつお）

医学の進歩はめざましいが、血液疾患のそれは本当に隔世の感がある。私が研修医のころは急性白血病は致死率の高い病気だったが、水泳の池江璃花子選手が白血病から見事に復活したことは記憶に新しい。

そんな今でも輸血は様々な血液疾患および臨床現場での治療として重要な役割りを果たしていることはご承知の通りである。

私が最初に献血したのはいつだったか忘れてしまったが、この15年ぐらいは年に１～２回400mLの全血献血をしていて、このたび計42回となった。昔は200mLの献血もしたことがあるが、ほとんどは400mLだったので、単純計算で16リットルほどとなる。

現在の日本の規定では70歳になる前日まで献血可能となっているため、今回めでたく“卒業”となったのだが（**写真１**）、高齢者は昔より元気になっており、上限年齢の見直しがあってもよいのではと思ったりしている。

献血した人は分かると思うが、以前と比べると問診がとても詳しくなり、私も数日前の歯の治療で引っかかって献血できなかったことがあった。最近では体重も測り、事前検査は指尖部からのわずかな量の血液を採取して行うなど時代の変化も感じることができた。

私は看護学校で講義をしているので、ある講義の最後に、１年生に聞いてみた。骨髄提供の経験者はさすがにいなかったが、献血の経験者は２割程度であった（今は16歳から献血が可能）。実は全国的に若者の献血協力者数はかなり減っており、厚生労働省や日本赤十字社は献血者の確保に苦労しているようだ（**写真２**）。

献血のメリットとして、景品（これにも移り変わりがあるが、略。**写真３**はポケットティッシュ）や自分の採血データを知ることができるほか、看護学生ならではのメリットとして、先輩看護師の採血技術や心配りを身をもって経験できることが挙げられる。学生には誘い合って献血に行くことを勧めているが呼びかけの効果については定かではない。

これを読んでくださった70歳未満の皆さんも各地の献血ルームに足を運んで、もっとも手軽にできる臓器提供をされてはいかがだろうか。

写真１　献血カードのウラ面。
次回献血可能日（下線）が×（不可）となっている。

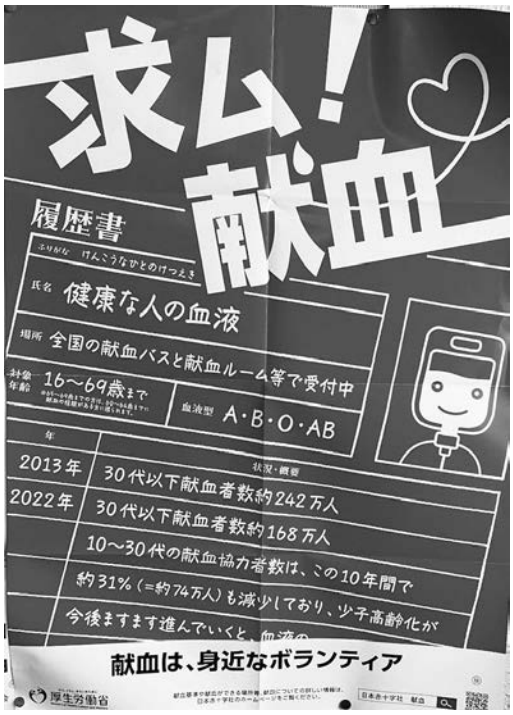

写真２　献血を呼びかける厚生労働省のポスター

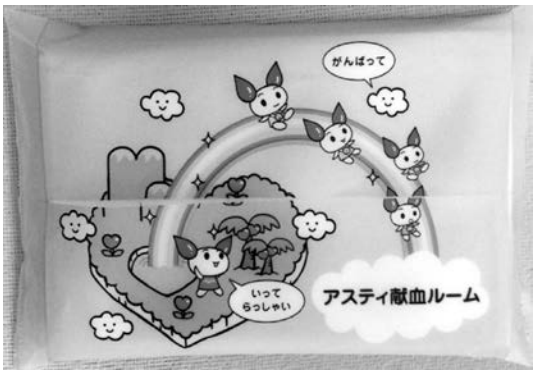

写真３　景品としていただいたポケットティッシュ。
もうもらえないと思うと寂しい。